



新型コロナウイルス感染症の5類移行から1年たったのに合わせ、熊日は感染後の後遺症や、マスク着用の意識変化を聞くアンケートを実施。感染者のうち約15%が後遺症とみられる体調不良を経験したと答えた。今もマスクを「常に着用する」と答えた人が約45%に上り、警戒が続いていることがうかがえた。

アンケートは熊日の「SNSこちら編集局」登録者を対象に4月26～30日に実施。県内を中心に653人から回答を得た。多くの意見を集める目的のため、無作為抽出する世論調査とは性格が異なる。

回答者の54.4%が感染。うち49.6%が感染後の体調不良を経験した。世界保健機関（WHO）が後遺症の定義とする体調不良が2カ月以上続いたのは15.2%で、WHOの「10～20%」とする見解と一致した。11.0%は症状が半年以上続いた。34.4%は症状が2カ月以内だった。

症状（複数回答）を聞くと、せきや喉の痛みが43・1%と最も多く、倦怠感が41・9%、味覚・嗅覚の障害が32・9%と続いた。

性別では男性の41・2%に対し、女性が50・6%。年代別では30～50代が高い傾向を示した。

マスクの着用は45・2%が「常に着用する」と回答。「ときどき着用する」が34・8%と続いた。「常に着用」は10～60代の各年代で最多だったが、70代以上は「ときどき着用」が最多だった。

自由回答には「両親が高齢なので万が一を考えて外せない」（八代市、60代女性）、「自分が感染源になりたくない」（宇土市、40代女性）など、5類移行から1年たっても感染を強く恐れる声が目立った。一方で「マスクがないと落ち着かない」（天草市、20代男性）、「マスクを取るのが恥ずかしい」（大津町、50代女性）など、長引くコロナ禍で着用が前提の生活になった様子も見えた。

マスクと感染歴との関係では、後遺症を感じた人の50・6%が今も常に着用。「職場で感染し死にかけたから」（熊本市、50代女性）と感染が着用の動機になっている人もいた。

3月末で無料接種が終了したワクチンについては、昨年5月以降に「接種した」が33・4%で、「接種していない」（66・6%）を下回った。（丸山伸太郎、横川千夏）